全酪連会報 9

2024 SEP No.708

ZENRAKUREN

酪農とのかけはし／
齊藤達夫先生

第75年度（令和6年度）
通常総会開催される 詳細報告

第51回 全国酪農青年女性酪農発表大会
酪農意見･体験の部

購買生産指導部だより／
DMSシステム 2023年集計結果

日本酪農見て歩紀／
小原牧場
（大分県杵築市）

酪農トピックス／
全国農協乳業協会
能登半島地震における
支援物資調達協力について、農林水産大臣から
感謝状を授与されました（酪農部）ほか

全酪連仙台支所移転のお知らせ

（一社）全酪アカデミー活動報告

農業経営統計調査 営農類型別経営統計に
ご協力ください

LINE公式アカウントができました！
登録お願いします！

酪農青年女性会議
@642bpcwk

全国酪農業協同組合連合会

酪農とのかけはし

第51回　酪農技術アドバイザー

齊藤達夫先生

農業高校の教師、酪農協の技術顧問としての経験と知識を活かした若手職員の指導育成!

これまでの経歴

今回紹介する齊藤達夫先生は1944年（昭和19年）生まれの御年79歳です。栃木県立馬頭高校を卒業後、酪農学園大学に進学、そして1967年（昭和42年）から1982年（昭和57年）まで喜連川高校農業科、1982年から栃木県立那須拓陽高校畜産科（当時県立那須農業高校）で2005年（平成17年）まで教鞭をとられます。退職後は2005年（平成17年）6月から酪農とちぎ農業協同組合の理事1期を務め、兼任されていた技術顧問を2021年（令和3年）まで務めました。現在は全酪連東京支所の若手研修を主にアドバイザーとしてご活躍いただいております。

県立高校での指導

酪農学園大学を卒業された齊藤先生は赴任した県立喜連川高校農業科で指導され、同校の農場で5頭の牛の管理と、2・5haある圃場の管理をされました。当時の平均個体乳量は3，500kg～4，000kgであり、これを8，000kgにすることを目標に生徒たちと約束し飼養管理をスタート。このころ、栃木県で

はあまり栽培されていなかったアルファルファの栽培利用や、家畜用のビートの栽培にも着手されました。当時の貯蔵方法は主に乾草だったため、アルファルファを乾燥させる際に、葉が落ちてしまって苦労した記憶はいまでも鮮明にあるそうです。また、日本の企業が開発した自動哺育機も導入されました。自然界により近いかたちで多くのミルクを給与し、大きな牛を育て、共進会へ出品したいとの思いからでした。生徒たちと約束した個体乳量8，000kgを達成するのに15年かかったとのことで、牛群の改良、乳量の増加は一朝一夕ではできないことを肌身で感じたそうです。

その後赴任した県立那須拓陽高校（当時県立那須農業高校）では当初、ホルスタイン20頭、和牛1頭を飼養していたそうです。同校は畜産関係の後継者が多いこともあり、酪農、畜産の魅力を感じてもらえる実習農場経営に奮闘されました。そのために、高泌乳牛の育種管理、高品質粗飼料の生産、環境整備、共進会への出品などを行いました。平成7年には全国ホルスタイン共進会（千葉県）に初出場、未経産の部1頭、経産牛の部1頭を出品しました。それ以降の全国ホルスタイン共進会には連続で出場するまでになりました。前述の通り、畜産後継者の多い高校だったため、卒業後の後継者応援のために酪農家にはホルスタインのメス子牛を、和牛農家にはF1のメス子牛と実習農場で採卵した和牛の受精卵を学校長賞の副賞として贈呈する取り組みの立案も行ったそうです。この取り組みには、新聞5社、テレビ1社、他多数の取材が入り、実習農場の初妊牛を北海道に購買に行った際には「卒業生に牛をプレゼントしている高校ですよね。」と声を掛けられることもしばしばあったそうです。

また、生徒たちの北海道中標津郡中標津町計根別への酪農家実習やオランダでの海外実習にも帯同し、現地の酪農家さんとのつながりや府県と北海道、日本と欧州の圃場管理の違いを体感し、実践できるアイデアを常に探していたそうです。

酪農とちぎ農業協同組合での技術指導

県立那須拓陽高校を退職されてからは、酪農とちぎ農業協同組合で理事及び技術顧問に就任されました。技術顧問としては、酪農とちぎ農業協同組合の組合員の牧場へ赴き、実際に牛をモニタリングし、より良い飼養管理になるよう改善の提案を行ってきました。検定利用農家の中には成績をしっかり確認せず、有効利用できていない方もいたため検定成績の有効活用方法についても地道にアドバイスされていました。高校時代に指導を受けていた酪農家さんのなかには、厳しかった高校教員時代と丁寧に給与メニュー、乳成分、検定成績を検証し指導してくれる姿にギャップを感じるとおっしゃる方もいたそうですが、先生の指導に納得し取り組んでくれたそうです。

就任当時６００戸ほどの酪農家がいた組合を巡回、指導することで規模拡大路線でなくとも十分に収益を上げることができることを再確認したそうです。特に移行期管理の徹底と自給粗飼料の有効利用を行っている酪農家ほど無理なく牛を飼養できており、今後の酪農経営を存続していくために取り組むべきポイントとおっしゃっておりました。自給粗飼料の有効利用という観点では、稲わらを乾物として６～７kg給与し、牛群平均乳量１１，６５０kgを記録した方もおり、現在でも定期的に牛の状態確認と飼料給与内容の精査を行ってサポートしています。

全酪連アドバイザーとしての後進育成

全酪連のアドバイザーとしては、酪農とちぎ農業協同組合技術顧問を退職された２０２１年より、主に東京支所の若手推進職員の指導を行っていただいております。定期的に行われる農場での実地研修では、牛の見方（ＢＣＳ、毛艶、フケの状態、皮膚の弾力性、蹄のスコア、糞のスコア）や、状態に合わせた飼料給餌メニューの作成、提案方法をご教授いただき、他にはパーティクルセパレーターを用いたＴＭＲの切断長の評価方法、糞洗いを用いた消化性の確認方法もご指導いただいております。デントコーンの収量調査の方法、圃場の肥培管理についても、酪農家の皆さんとお話ができるようにとご自身で管理されていた経験も交えお話いただいております。

酪農業界に向けて

牛は人間の食べられない草や副産物を食べ、栄養豊富な牛乳や肉として我々の生活を豊かにしてくれる生き物です。欧州に視察に行った際は、国産のチーズや乳製品を高値でも国民が消費することで国内の食料生産を守るという意識がしっかりとありました。日本では安価な乳製品に購買意欲が流れる傾向にありますが、業界に携わる人々の意識から一般の消費者の意識まで変えることで、酪農に誇りを持って就農し営農を続けていける将来になることを願っております。

第75年度（令和６年度）

通常総会開催される

詳細報告

本会は、７月25日㈭明治記念館（東京都港区元赤坂）において、第75年度通常総会を開催し、令和５年度の事業実績、剰余金処分案、第十三次中期事業計画案、令和６年度の事業計画案の承認を得るとともに、役員の改選を諮った。

午後1時、定刻開始となった総会の冒頭、挨拶に立った隈部洋代表理事会長は、会員並びに来賓各位の参集に対し謝意を述べた後、

国内の酪農情勢について、「飼料価格高騰が続く中で飲用向け乳価はこれまで2度の値上げが行われ、一時よりも光が見えてきた状況だと思う。しかしながら日米金利差による円安や燃料費の上昇により、コストの高い経営を余儀なくされており、まだまだ厳しい状況が続いている。令和5年度の全国の生乳生産量は、生産抑制に加え夏場の記録的な猛暑により前年比96・5％となった。一方消費については、気温上昇やインバウンドによる増加が期待されたが、値上げの影響もあり前年を下回る状況が続いた。令和6年度の生乳生産量については、猛暑の影響が大きく当初の予測よりも生産が伸びていない状況であり、生乳需給も緩和から逼迫の局面を迎えつつある。まずは輸出を含めた需要回復が一番重要であるが、生乳生産については増産を目指すべきだと考えている。そのためには自給飼料の増産に加え、後継牛の確保、暑熱対策への取り組みが重要である。」と述べた。

▲ 隈部会長

また、全酪アカデミーの事業について、「令和5年度に2組が新たに酪農家としてスタートを切った。9月に熊本県、11月に福島県で酪農経営を開始した。その活き活きとした姿は周辺の酪農家にも刺激を与え、地域活性化の源となっている。わずか2件ではあるが、令和4年度の都府県における新規就農が5件だったことを考えると2件というのは大きな貢献になったと思う。令和6年度と令和7年度にも新規就農者が誕生する見込みである。今後も賛助会員と共に酪農生産基盤の維持に努める所存である。」とし、さらに、7月に名古屋で開催された全国酪農青年女性酪農発表大会について、「坂本

農林水産大臣に来賓として出席をしていただき、ご挨拶の中で『酪農業は子供たちから高齢者まで日本全体にとって必要不可欠である。酪農家の経営意欲が実現できるよう、国として酪農業を全力で支えていく』と強いお言葉をいただいた。本会としても政策に対応した事業を一層強化していく。」と述べた。

次に、令和5年度の本会の事業実績について、税引前当期損失が約4億4千6百万円となり、上期はコストの高い原料や輸入粗飼料の在庫の関係で大きな損失を出した一方、会員の皆様のご協力と在庫が解消されたことから下期の収支は黒字となったが、剰余金処分案として会員の皆様に対し、1％の出資配当は実施し、事業分量配当は未実施となることをお詫びした。

そして、第十三次中期事業計画について、「令和3年度に策定した全酪連将来ビジョンにおける基本姿勢として、持続的な酪農生産基盤の構築を掲げている。将来ビジョンに基づく具体策として、販売事業の強化、業務効率化を柱とした第十三次中期事業計画を設定している。この計画を着実に実行し、現場の酪農家に寄り添う姿勢を明確にしつつ、我が国の酪農が直面する様々な課題に対応していく。また、この計画を全役職員が認識し、次の段階へステップアップすることを目指す『NEXTSTAGE全酪』を合言葉に酪農家の皆様が前を向いて進めるよう励む所存である。」と述べ、最後に、「会員、酪農家の皆様には日頃から多大なるご理解とご支援をいただいていることに改めて深く感謝するとともに、引き続き、ご協力を賜りますようお願いしたい。」として開会の挨拶を締めくくった。

▲ 農林水産省 畜産局 松本局長

本総会には来賓として、農林水産省畜産局・松本平局長、農林中央金庫・尾崎太郎常務執行役員をはじめとして、一般社団法人全国酪農協会等関係団体からご臨席をいただいた。

農林水産省畜産局の松本局長は、1月に発生した能登半島地震やご自身の経歴に触れた後、昨今の酪農業を巡る状況について「資材の高騰や、コロナ禍以降消費マインドが回復しない中での生産または流通販売という点において非常に厳しい状況の中で皆様が努力されておられると改めて認識した。生産消費の面では、脱脂粉乳の在庫が非常に多い話も伺った。政府としても対策を講じつつ、団体と業界の皆様方の協力を得ながら、低減に向けて取り組んでいる状況である。また、販売の関係についても、流通を含め、消費者に対する消費喚起、出口戦略が必要である。在庫対策と消費拡大の2面について早急に取り組み、すでに取り組んでいる内容については、引き続き効果を上げていきたい。流通の関係についても状況が変化している話も伺っている。特に系統外の流通については、厳しい局面においてお互いに協調・努力しなければならない問題である。農林水産省は、関係者が一同に会する連絡会議を開いており、早急に軌道に乗るよう進めていきたい。今後の経済においては円安局面から少々戻りつつあるように感じられる中、中期的に取り組む課題についても先を見据え取り組む所存である。」と述べられた。

さらに、5月に改正された食料農業農村基本法について、「基本的な考え方を整理したところであり、これに基づく基本計画の策定作業を進め実際の行動に結びつけていく。その過程で我々が酪農業の将来を見据えた中期的なビジョンを考えていかなければならない。これについては業界の皆様方のご意見も伺いながら、また行政としての方向性を立てていきたい。課題は山積しているが、一つ一つ歩を進めていくことによって、皆様方が将来に向けて酪農経営を維持・発展できるように取り組んでいきたい。」と述べて挨拶を締めくくられた。

次に、農林中央金庫の尾崎常務執行役員は、来賓挨拶にて農林中央金庫の状況に触れた後、総会開催へのお祝いの言葉とともに、農林中央金庫の業務への理解・協力にお礼の言葉を述べられた後、「隈部会長、松本局長のお話にもあったとおり、現在の酪農経営は、歴史的な水準での

円安進行も含め、資材・エネルギーコストの高止まり等、依然として厳しい環境にあると認識している。これらによって酪農現場でのさらなる離農数の増加も懸念されており、酪農生産基盤への影響が大変危惧されるところである。貴連合会においては、持続的な酪農生産基盤構築を目指し、酪農生産物の販売強化や、酪農経営環境の安定化に向けて生産者ニーズに寄り添った飼料販売メニューの提案等に注力されていると伺っている。改めて、会員・役職員の皆様のご尽力、並びに隈部会長のリーダーシップに深く敬意を表したい。酪農経営にとって厳しい局面が続くが、酪農業が我が国の農業振興

▲ 農林中央金庫 尾崎常務

において重要な位置づけであることに変わりはなく、貴連合会の果たすべき役割は、今後より一層大きくなるものと思われる。農林中央金庫は、系統の金融機関として、酪農の生産基盤維持・発展に向け、貴連合会をはじめ酪農団体とともに歩んでいく所存である。」と述べられ、挨拶を締めくくられた。

その後、高来 直人氏（石川県酪農業協同組合 代表理事組合長）を議長に選出して議事に入り、いずれの議案も賛成多数で原案どおり承認された。

最後に、高来議長は議事終了後の挨拶において、「1月1日に能登半島地震という未曾有の出来事があり、未だまともな状況には戻っていない。能登半島では生乳の出荷量が前年対比70％程であるが、全国の皆様から義援金と応援をいただき頑張っている。いただいた義援金は総額6，000万円を超えた。大変ありがたく、生乳の廃棄やタンクローリーでの給水経費に充て、最小限の廃業で食い止めている。これから復興に向け一丸となり一生懸命頑張っていこうというところである。これも一重に皆様方の応援のおかげである。改めて御礼申し上げたい。」と述べられ、議事が終了した。

▲ 高来議長

議事終了後、小前副会長理事が閉会の挨拶に立ち、会員並びに来賓に対し謝意を述べた後、高来議長に対し「滞りなく議事を進めていただき、感謝申し上げる。また甚大な被害に遭われた中で酪農の復旧・復興に努められた、そのご尽力に敬意を表する。酪農経営そのものが厳しい中で、全国の酪農家、そして全酪連も思いを共有して、石川県の酪農がますます発展していくこと願っている。」と述べた。また、2年連続で損失決算ということになったことを踏まえ、「会としても、令和6年度は利益が生まれるように経営改善に取り組んでいきたいと思っている。それには会員の皆様が購買事業の推進に努めていただくことが不可欠である。生まれた利益は会員の皆様に還元し、そして支援に繋げていきたいと思っている。役員改選により新しい体制になるが、本日いただいた『酪農家戸数が減少しないように、そして消費拡大に向けて取り組むように』というご意見をしっかりと踏まえて、酪農専門農協の全国連の役割をしっかり果たしていきたい。会員の皆さんには引き続き会の運営、事業にご理解とご協力をいただきますようよろしくお願いしたい。」と締めくくり、第75年度通常総会は終了した。

▲ 小前副会長

第51回 全国酪農青年女性酪農発表大会

酪農意見・体験の部

今月号では、7月18日㈭～19日㈮に愛知県名古屋市『名古屋東急ホテル』において開催いたしました第51回全国酪農青年女性酪農発表大会の酪農意見・体験発表の部の審査講評を中心にご紹介します。

8月号でご紹介した酪農経営発表の部に続き行われた酪農意見・体験発表の部も、各会議から選出された6名により行われ、①酪農との関わり②周囲とのつながり③活動の広がり④目標と夢の実現性の4つの観点から慎重に審査が行われました。

発表内容は、栗本まさ子審査委員長による審査講評にてご紹介いたします。

酪農意見・体験の部 審査講評

公益財団法人 日本乳業技術協会 顧問
栗本まさ子審査委員長

酪農家さんにこれ以上辞めないでいただきたい！という一心で審査委員長という大役をお引き受けしたのは8年前。それからいったんは生乳が足りなくなり、その後、コロナ禍で余ってしまい、飼料などの価格の高騰、高止まり、自然災害などで、みなさんや牛たちの悲鳴が聞こえるようでした。一方で、みなさんの理解醸成活動などのご尽力によって、広く消費者にこうした苦しい状況が伝わり、日本の食料生産はこのままではダメだ！ということが5月に成立した改正食料農業農村基本法に盛り込まれました。6名の方々のご発表は、心強く、すばらしい発表ばかりでした。

酪農意見・体験の部

牧之瀬（まきのせ） 佳貴（よしたか）さん（北海道会議）が最優秀賞を受賞!!

茂木（もぎ） 梨恵（りえ）さん（東北会議）が審査委員長特別賞を受賞!!

私と酪農 ～これまでの歩みと今後の展望～

中部酪農青年女性会議
西尾（にしお） 優子（ゆうこ） 氏

幼いころから動物好きだった西尾優子さんは、酪農家の3代目。農業高校では園芸を学びますが、海外研修での貴重な体験を経て、実家の酪農を継ぐことを考えて農業大学校へ進学されます。離農が相次ぐ厳しい環境下、ご両親の反対を押し切って県内の酪農家で研修し、新しいこと良いことは積極的に取り入れるという経営方針を学び、消費者との交流や酪農教育ファームの取り組みを通じて「自分と消費者の酪農に対する常識のギャップ」に気付き、多くのやりたいことを持ち帰って就農。そして、すぐに酪農教育ファームの資格や認証を取得し、「消費者は何を知らないのか?」をまず知り、酪農を身近に感じてもらえるよう活動し、東濃まきば館で教育ファームや乳製品、ユニークな牛柄グッズの販売も行うことによって、積力的に活動を続けておられます。

今後は、より広範囲な仲間づくり、つながりづくりを進め、コロナ禍での経験も活かしたあらたな活動もお考えです。早く「農家の常識が消費者にとっても常識になるように」、また、できれば、町内の酪農家さんがこれ以上減らないよう、西尾さんの仲間づくりと積極的な活動が期待されます。

酪農は本当に面白い商売だ！

関東甲信越酪農青年女性会議
野口 旭洋（のぐち てるひろ）氏

まったくの異業種である繊維業界で9年の経験を積んでお父様の会社を継ぐために地元に戻った野口旭洋さんは、叔父様の夢のある牧場経営に魅せられ、酪農業界の流通・販売のシステムに驚き、面白さを感じて牧場業務に専念することを決めます。

社長が突然辞めてしまうというとんでもない事態は大変だったと思いますが、がむしゃらに乗り越えて、牧場の目標だった牛舎建設と搾乳ロボットの導入に用地の取得から挑みます。従業員のための「働きやすい環境づくり、長く仕事を続けてもらえる体制づくり」は今どこの業界でも大変重要視されていますが、いち早く取り組んで成果を上げておられます。

取り巻く環境が厳しさを増す中、普通なら守りに入ってしまうのに、増頭、ロボット牛舎の稼働、たい肥の適切な扱いまで果敢に攻め、これからの酪農経営のひとつのすぐれた経営モデルのように見事に成功させておられ、こんなふうにチャレンジできるんだ！というエネルギーを感じます。地域とのつながりを大切に、飼料基盤の強化に取り組み、インターンなどの受け入れにも積極的です。さらに和牛の増頭や6次化にも興味をお持ちで、今後のご活躍がとても楽しみです。

他の業界を十分に経験したうえで、「酪農は面白い商売だ」とおっしゃる言葉は大変貴重で、どんどん発信していただきたい発表でした。

乳製品を通じて牛の優しさが届きますように

東北酪農青年女性会議
茂木 梨恵（もぎ りえ）氏

牛のママである茂木梨恵さんは、サラリーマン転勤族のご家庭で育ち、北海道の大学の剣道部で出会った牛のパパ（夫）に『一緒に酪農をしよう』とプロポーズされ結婚しますが、酪農家である茂木家で酪農にはかかわらず病院の調理員をしていて、体にいいものを提供したいと考えるようになります。

（一社）蔵王酪農センターの研修を受けたことをきっかけに6次産業化に取り組もうとしたところで東日本大震災！甚大な被害、全頭廃用という、もうとても立ち直れないようなつらい経験をなさいますが、この経験から、牛のママ、本物の酪農家さんになって、茂木家ファクトリーも立ち上げ、手作りバターからはじめ、ヨーグルト、ノンホモ牛乳をイベントやマルシェで販売し、大人気です。将来の夢は、放牧酪農と食育活動の幅を広げることとおっしゃいます。どちらも実現できそうです。

はじめは「酪農に全く魅力を感じられない日々を過ごした」という牛のママが愛情を注いで育てているからこその、優しい牛たちからのおくりもののような乳製品から、牛の優しさも、酪農の魅力も、元気と明るい希望も届けられていると思います。どうか届け続けてください。

人生に、酪農という選択肢を

北海道酪農青年女性会議
牧之瀬 佳貴（まきのせ よしたか）氏

牧之瀬佳貴さんは、カナダ留学、設備メーカーで世界を飛びまわる生活をしたのち、結婚を経て人生観が

変わり、家族とより多くの時間を過ごせる生活を求め、北海道へ移住。研修を経て第3者継承で新規就農されました。

牧場でも家でも家族との時間を増やすための工夫をして、家族との過ごし方や働きかたがサラリーマン時代と比較して大きく改善された。このことを都会で悩んでいる人たちに伝えたい、「酪農＝家業」のイメージを変えて酪農が「転職先の選択肢」になることを多くの人に伝えたいと、非農家出身の若者の酪農体験も積極的に受け入れておられます。

酪農の魅力を感じてもらうために、自分自身が幸せそうにしていなければならない、との考えは、企業などでも「今の若い人たちは先輩たちが幸せそうかどうかを見ている」と言われておりとても重要だと思います。

他の業界での経験が活かされていると思われる多様な6次化も、SDGsを意識した牧場づくりもすでに進めておられ、これからの酪農のひとつの理想形ができあがるのが楽しみです。今は環境が厳しいですが、乗り越えて、日本の酪農の将来のために5つの理想を実現させていただきたいです。

今更だけど、ワークライフバランス

九州酪農青年女性会議
松本 裕子（まつもと ゆうこ）氏

佐賀県の畜産技師として結婚後も勤務を続けた松本裕子さんは、21年間勤めて退職し、酪農に本腰を入れます。長年外から客観的に酪農を見つめてきた経験から、長すぎる拘束時間が後継者や従事者が育ちにくい根本的原因だと考え、酪農業を持続的に発展させるためには酪農への従事時間を減らし自分のための時間を作り出していき、仕事と生活の調和を充実させ、人生を楽しんでいる酪農家の姿を見せることが重要として率先して取り組んでおられます。

パワフルさが畜産女子部の立ち上げから尽力された初代会長として、町の教育委員として、農場見学、体験・出張講座、技能実習生のきめ細かいケアなど重要かつ多様な役割を多く担い、多忙を極めておられワークライフバランスの実現にはもう少し時間が必要と思われますが、「人生を思いきり楽しんでいる酪農家さん」としての姿はすでに十分に見せていらっしゃいます。

酪農家さんだけでなく、パワフルさが畜産女子部のみなさんがワークライフバランスを実現し「人生を楽しんでいる畜産農家さん」たちになれるように、次世代の酪農・畜産業のために、取り組みをすすめていただくことを期待しています。

酪農　苦農　楽農

西日本酪農青年女性会議
中川 美弥子（なかがわ みやこ）氏

岩手県の非農家出身のお嬢様だった中川美弥子さんは、NHK盛岡放送局に入社した研修初日にひとめぼれ！猛アタックの末、牛飼いをするため徳島へ帰った夫のもとへ行き晴れて結婚。牛舎の2階での楽しい新婚生活が一年足らずで父親と意見が合わなくなり追い出され、車中泊や古屋で過ごし、電柱を再利用した牛舎を自分たちで建てるなど大変な苦労をされますが、楽しい毎日だったと振り返っておられます。2人の娘さんたちが幼いころから協力的で、3歳で牛追いをするとはすごいですし、トラクターの事故でご主人が大けがをされたときも、全力でサポートするという娘さんの問いかけで、ご主人が戻るまで大切な牛を守ろうと決意し、3人で頑張って乗り越えてしまいます。大好きなご主人をサポートするために筋トレもはじめ、「最後まで大切に牛を飼う」という酪農家の心の原点のようなポリシーを変えることなく、これからも酪農を続けていかれます。さらに、山の中で育成放牧し、「長命連産」の牛群を作ることを目標にしておられます。

ドラマにしていただきたいような

波乱万丈の人生を送ってこられました。どうしてこんなに頑張れたのですか?との問いに、夫の喜ぶ顔が見たいから、と。ほんとうにご主人が大好きなのですね。どうか、ご夫婦一緒に目標を達成され、幸せな牛たちと、お幸せにお過ごしください。

6名のご発表は、ほんとうにどれも、さまざまな分野のたくさんの方々に聞いていただきたいすばらしいご発表ばかりでした。最優秀賞はひとつだけなので、審査委員一同ものすごく悩み、議論や沈黙を重ね、ついに意見の一致を見ました。

最優秀賞は、持続可能な酪農業界のため、とか、どうしたら酪農家さんが減らないか、酪農業界全体のこれからをいちばん真剣に考え、45歳までに新牛舎を建て、今の牛舎を新規就農者に譲渡することまで描いておられる、北海道の牧之瀬佳貴さんに決定しました。

東日本大震災の大惨事、全頭廃用といううらい経験を乗り越えて見事に酪農を立て直し、6次化まで成功させていらっしゃる東北の茂木梨恵さんには、審査委員長特別賞を授与することといたしました。

それから、関東甲信越会議の野口旭洋さんには審査委員全員からのお願いです。是非、経営発表に出て、その後の成果を見せてください。

発表者のみなさまが、「日本の酪農は大丈夫」「こんな風にやれば明るい未来を迎えられそうだよ」とおっしゃっているような、ほんとうに素晴らしい発表でした。どうか、「酪農ってこんなにいいよ!」「だから辞めないで!」「一緒にやろうよ!」と、発信や活動を続けてください。審査委員一同の心からのお願いです。

発表者のみなさま、ご家族、地域や関係者のみなさまに、改めて心からの敬意を表し、感謝して審査講評といたします。（審査委員長　栗本 まさ子）

18日、酪農経営発表及び意見体験発表終了後は、参加者320名に及ぶ懇親会が開催されました。全国にいる酪友との久々の再開に会場は終始大きな賑わいをみせました。明日から牧場に戻る日常への英気を養うことができていれば嬉しく思います。

審査講評・表彰式終了後は、斎藤監事（次期副委員長）による大会宣言、山下監事（次期副委員長）による閉会の辞をもって全日程を終了しました。

来年は、7月17日㈭～18日㈮に岡山県岡山市「ホテルグランヴィア岡山」にて開催予定です。ハレの国「岡山」で、皆さま笑顔でお会いしましょう!

DMSシステム

2023年集計結果

1 DMSシステム事業の概況

DMSシステムが運用され始めてから今年で17年目を迎えました。図1は、生産者の皆様に当事業をご利用頂いた戸数の推移です。A～Cプランの方には、2022年より運用を開始した新酪農用会計ソフト「Z-RABO（ジー・ラボ）」をご利用頂いておりますが、2023年より、耳標異動履歴の自動連携ツールの本格運用を開始致しました。これにより、今までに比べ家畜台帳への入力作業の負担軽減を図れるようになりました。今後も、酪農経営管理に有益な、より使いやすいツールを目指して開発・普及に努めて参ります。

2 2023年の集計方法

表1は、2020年（令和2年）～2023年（令和5年）までの牛群動態、収入、支出及び所得の推移について、DMSシステムで経営管理をしている農場の平均値を経産牛1頭あたりとして示したものです。DMSシステムでは2022年より、「Z-RABO」を利用しており、消費税の会計処理は原則として税抜経理方式を採用していますが、2020年と2021年では、前システムによる決算であったため税込・税抜経理処理が混在していました。そのため、各勘定科目において年度間比較ができるよう、税抜経理方式を基調として補正した数字を掲載しています。例年、比較的家族経営に近い法人10戸余を含む91～96戸を集計対象としていますが、2023年データにおいては、96戸の平均であり、うち89戸は2022年と同農場のデータを使用しています。

3 牛群動態と生産指標

2023年では、集計農場が前年度と異なることから平均飼養頭数については若干少ないデータとなっていますが、平均出荷乳量は概ね9,000kg強と、前年までとほぼ同じ水準です。更新率は29%と、昨年に続きやや高い数値となっていますが、死廃率（価格が付かずに除籍された牛が平均飼養頭数に占める割合）は8・9%とやや低めの値となりました。

乳飼比については、60・5%と、昨年に比べ3・4ポイントの減少となっています。輸入飼料価格は2021年から2022年にかけ顕著に上昇し、その後も高い水準で横ばい推移となりました。その影響を受け、1頭当りの飼料費は2023年が最も高くなりました。一方で、乳価の上昇による生乳売上高の上昇が、飼料の高騰を支えた収支構造となっており、前年に比べ乳飼比を押し下げたと言えます。

4 総収入は前年に比べ大幅上昇

収入の内訳をみると、乳価上昇に支えられ、生乳売上高が大きく上昇しています。乳価は2022年の11月以降、段階的に上昇してきました。乳価が上がる前の2020年に比べ2023年では経産牛1頭あたりの生乳売上高は約14万円上昇しており、これは平均生産乳量によって乳単価に直すと16円／kg程度に相当します。2021年以前に比べた現在の乳価を20円／kgの上昇と考えれば、2024年決算ではもう少し改善する見通しとなります。

一方で、副産物収入である肉用子牛売上高は、相場の下落から非常に低い水準となっています。また、補助金を始めとした各種飼料高騰対策により、2022年以降顕著に上昇した雑収入は、飼料価格が乳価に転嫁されたことにより今後減少に転ずると考えられ、経営環境に対しマイナスの要因となると思われます。

5 総支出も大幅に上昇

2023年の経産牛1頭当たり総支出は、1,373,370円と、前年に比べ7万円以上上昇する結果となりました。顕著に上昇がみられるのはやはり飼料費で、前年に比べ4万円以上上昇しています。購入飼料費のこの数年の推移をみると、価格が落ち着いていた2020年と比較して15万円／頭以上も上昇しており、生産費高騰の主要因となっています。

また、動力光熱費も年々上昇してきており、電気・燃料を中心に、エネルギー価格上昇の煽りを受けている状況です。表1には記していませ

んが、自給飼料に関連する種苗費（前年比152％）や肥料費（前年比169％）についても資材価格高騰の影響から大幅に上昇しており、購入飼料費以外の生産コストについても今後の状況に注意が必要です。

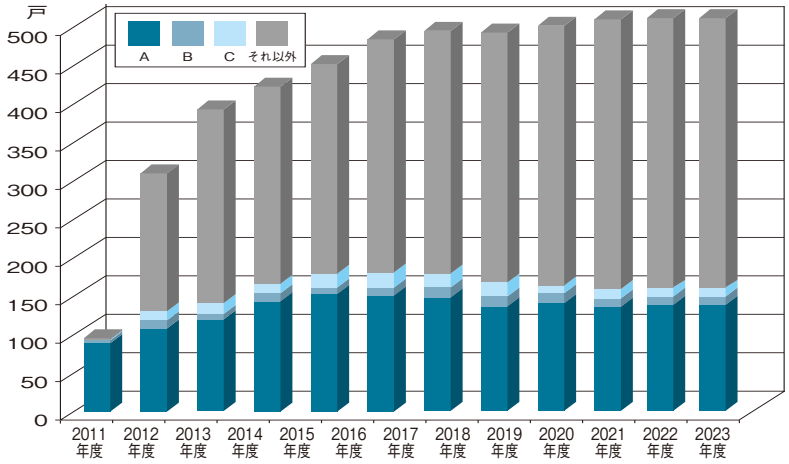
6 「家族所得」「酪農フリーキャッシュ」は回復傾向

以上のような収入・支出概況から、2023年の収支は、家族所得で109,784円／頭、酪農フリーキャッシュで186,676円／頭となり、2022年に比べ回復基調となりました。しかし、飼料高騰前であった2020年と比較すると、依然として所得・フリーキャッシュとも6～7割に留まっており、依然として厳しい経営環境に置かれた年となりました。また、総支出に占める飼料費の割合は以前と比べ高水準となっており、特に飼料の多くを購入（輸入）飼料に頼らざるを得ない経営形態の牧場が、より厳しい状況であったと言えます。

7 今後の見通し

2024年決算では、上述した通りの乳価上昇のタイミングを考慮すると、酪農経営の主要な収入である生乳売上高については2023年に比べ引続き回復する見通しです。一方で、資材費や物流経費の更なる上昇や、副産物価格の低迷、対策資金の減額等の影響も顕在化している現状で、引き続き予断を許さない経営環境が継続すると思われます。まずは、現在置かれた収入・経費の水準でも経営を継続しうるよう戦略や生産目標を明確に立てた上で、経営に臨むことが重要といえるでしょう。

図1　DMSシステム参加農家戸数（2024年３月末時点）



	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
Aプラン	81	106	120	142	151	153	149	136	145	145	141	142	141
Bプラン	7	9	8	8	12	9	12	14	12	9	11	11	12
Cプラン	2	17	17	17	19	21	20	20	9	9	9	9	9
それ以外*	3	174	243	249	265	295	301	314	316	327	339	341	341
合計	93	306	388	416	447	478	482	484	482	490	500	503	503

＊それ以外…DMSシステムのデータベースを利用した経営分析の実施や経営相談の依頼を受けた戸数（累計）

表１　酪農経営の変化

	2020年	2021年	2022年	2023年	前年差
牛群動態/主な指標					
経産牛頭数	53	54	54	46	-8頭
平均出荷乳量（kg/頭）	9,088	9,015	9,134	9,025	-109kg
更新率	26.5%	26.3%	29.9%	29.0%	-0.9%
死廃率	9.3%	9.3%	11.6%	8.9%	-2.8%
乳飼比	54.2%	57.4%	63.9%	60.5%	-3.4%
家族所得率	12.0%	9.1%	4.5%	7.4%	2.9%
				経産牛１頭当たり（円）	
総収入	1,330,788	1,328,709	1,360,769	1,483,153	122,384
生乳売上高	1,027,112	1,021,257	1,038,543	1,169,327	130,784
肉用子牛売上高	136,346	132,960	112,878	78,099	-34,779
廃用牛売上高	28,717	29,042	33,343	32,389	-954
その他売上高	23,955	18,538	20,174	43,884	23,711
雑収入	114,658	126,912	155,831	159,454	3,623
総支出	1,170,547	1,207,248	1,299,323	1,373,370	74,046
雇人費	42,917	41,601	56,475	46,538	-9,937
飼料費	552,923	580,412	663,441	707,075	43,635
診療衛生費	31,744	32,863	35,612	37,530	1,918
動力光熱費	50,631	54,236	56,756	58,884	2,128
共済掛金	32,163	35,497	27,634	31,249	3,615
修繕費	40,940	42,586	36,142	43,801	7,659
支払利息	1,940	2,704	1,920	2,254	334
減価償却費	176,869	183,563	171,881	182,858	10,977
その他経費	240,420	233,786	249,462	263,179	13,717
家族所得	160,241	121,461	61,446	109,784	48,338
フリーキャッシュ	290,348	256,139	141,972	186,676	44,704

※いずれの年も都府県の全酪連DMS利用者を集計範囲とし、2022年：年96戸、2023：年96戸、うち89戸は同一農場の集計。
※消費税の処理方法は、2021年までは税込・税抜処理が混在しているため、2020-2021年の数値は、消費税抜額に補正した。
※酪農フリーキャッシュ＝家族所得＋減価償却費－育成振替高＋廃牛売却原価

日本酪農見て歩紀 No.375

▲ 左より、幸司さん（本人）、美鈴さん（お母さん）、拓也さん（息子さん）、奈央さん（拓也さんの奥さん）

小原牧場
大分県杵築市

四代続く本物の酪農経営

地域の紹介

小原牧場がある杵築（きつき）市は大分県の北東部、国東（くにさき）半島の南部に位置し、別府湾に面する眺望の美しい海岸地域から自然豊かな山間部に至るまで、地形は多様で温暖な風土から生まれた柑橘類や豊かな豊後水道の海の幸が楽しめます。平成17年に旧杵築市、山香町、大田村が新設合併して誕生しました。東に大分空港、南は別府市・大分市に近く、北は宇佐市と隣接し、大分空港道路や宇佐別府道路、大分自動車道の3本の高規格道路の連結点として交通の要衝となっています。また、九州豊後路の小京都と呼ばれ、杵築城を中心とする城下町は、美しい坂道と南北の高台にある武家屋敷がその谷間にある商人の町を挟んだ凹凸のある

▼「サンドイッチ型城下町」を象徴する眺望

▼ 牛舎外観 左上の丘にロール

◀ ロールをきれいに並べてある牧場

日本唯一のサンドイッチ型城下町で知られ国の重要伝統的建造物群保存地区に認定されています。

牧場の概要・沿革

今回、訪問した小原牧場は、大分県酪農業協同組合（本川和幸代表理事組合長）の組合員です。大分県酪農業協同組合の出荷戸数は72戸（令和6年3月末現在）、令和5年度の生乳受託乳量は67，041tとなっています。

牧場主である幸司さん（52歳）は三代目です。子供のころから酪農を継ぐつもりで酪農学園大学へ進学し平成8年に就農しています。令和2年に父の春美さんがご逝去されたことを機に経営を継承されたとのことでした。

父の春美さんは、平成14年に農林水産祭で「三代続く本物の酪農経営」を発表され、着実な規模拡大、自給飼料依存型の経営、高泌乳への乳牛改良、省力的先進技術の導入、堆肥盤（自ら考案した可動式屋根付き堆肥化施設）の建設などに取組んだ結果、収益性・安定性・将来性を高く評価され、第41回農林水産祭天皇賞を受賞されるなど数々の賞を受けています。

小原牧場は、幸司さん、拓也さん（息子さん、27歳）、奈央さん（拓也さんの奥さん）、美鈴さん（お母さん）と親戚2名の合計6名のシフトで毎日4名が作業を行っています。休みが取りやすいように自給飼料、授精以外の作業全般を全員が切り回せるようにしており、日々みんなで牛を見るようにしています。自給飼料と授精作業は幸司さんの担当で少しずつ拓也さんも経験を積まれているとのことでした。

現在、繋ぎ牛舎で経産牛91頭と育成牛52頭にF1を加えて150頭を飼養し、生産乳量は日量2・3t程になっています。

自給飼料にも力を入れ、11・5ha（平成14年）から現在15haに拡大しイタリアンを中心にロールベールサイレージとして通年給与しており、今後も増やしたいと考えています。また、地域では「ロールをきれいに並べてある牧場」として通っています。

牧場の沿革は別表の通りです。

		内容
昭和	32年	祖父が経産牛1頭を飼育開始
	38年	春美さん就農、18頭牛舎建設、経産牛15頭に規模拡大
	54年	牛舎増築、経産牛40頭・育成牛20頭に規模拡大
	2年	育成牛舎増築、経産牛60頭・育成牛30頭に規模拡大
平成	8年	幸司さん就農、牛舎増築、乾乳舎増築、経産牛70頭・育成牛40頭に規模拡大
	12年	堆肥盤（可動式屋根付き堆肥化施設）建設
	14年	中畜全国優良畜産経営発表会 農林水産大臣賞受賞 第41回農林水産祭 天皇賞受賞 中畜畜産大賞 最優秀賞受賞、県民栄誉賞受賞他
令和	2年	幸司さん経営継承
	3年	拓也さん就農
	6年	飼槽・牛床改修、経産牛91頭・育成牛52頭に規模拡大

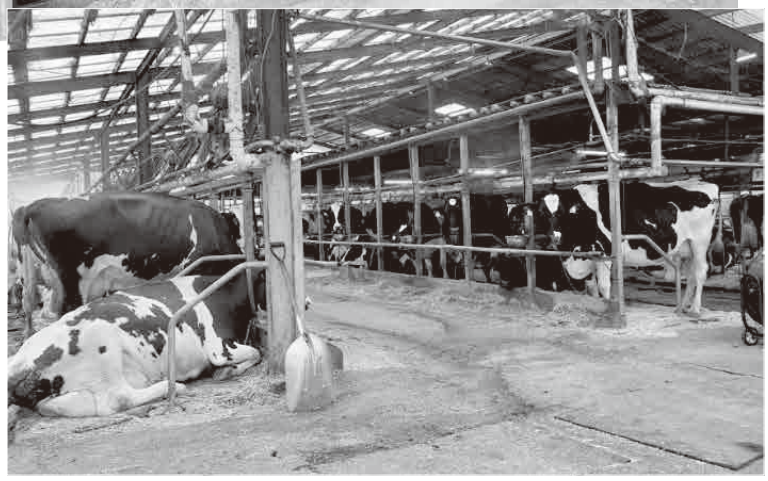
酪農廃業の危機を乗り越えて

令和2年に父である大黒柱の春美さんを失った幸司さんは窮地に立たされました。父の担っていた役割は大きく、経営継承したものの幸司さんと美鈴さんの2人では労働力不足で作業は回らず、毎日毎日ヘトヘト

になり規模縮小や廃業を真剣に考え、「もう無理か…」と諦めかけていた時に二筋の光が差し込みました。1つは、酪農を廃業していた親戚2人が就労してくれたこと、2つ目は、令和3年に拓也さんが実家に戻り就農したことです。

小原牧場は危機を脱し、身内のつながりによる安定的な労働力の確保ができたことで自家育成により頭数を増やし、自給飼料面積を拡大して行き、一時期は牛舎の建替えも考えましたが、敷地は現牛舎で一杯なため余地はなく、新たな土地の入手もままならず、あわせて「令和の酪農危機」の真っ只中でもあることから断念しています。

▼ 多くの換気扇で作業も牛も快適



▲ 4列対頭式牛舎

酪農経営の特徴

幸司さんが特に気を使って取組んでいることは繁殖で、牧場経営を左右するキーポイントの1つだと仰っていました。毎日4人で牛の状態を確認、近年では九州生乳販連が行うPAGs検査も利用して確度の高い授精をご自身で行い、分娩間隔の短縮や分娩の分散、需要期生産を意識しているそうです。また、規模拡大・増頭の方向ではなく夏場に強く健康的な牛群への改良や、カウコンフォート改善による生産性の向上を目指しています。ストレスの軽減のため、搾乳牛全頭に風が行き渡るように換気扇を増設し、ミストによる散水も行い、今年2月には飼槽や牛床マットの改修が行われています。

▼ 堆肥盤（可動式屋根付き堆肥化施設）

独自の循環型酪農

堆肥処理は、春美さんの考案した堆肥盤（可動式屋根付き堆肥化施設 面積300㎡・容量900㎥）にふん尿を投下しユンボで撹拌して水分調整を行います。完熟堆肥にはならないものの隣接した飼料畑にすべて還元しています。筆者も事前に堆肥盤の話を聞きながらもイメージが湧かなかった施設に興味をそそられ、牛舎から3㎞ほど離れた堆肥盤に案内していただきました。写真の通

り、地下型のサイロの両壁上部にレールを敷いて屋根が開閉できるようになっていました。平成11年に「家畜排せつ物法」が施行されたことから翌年に建設したとのことで春美さんの発想力と行動力に驚かされました。

四代目に引継がれる酪農経営

この日の取材には、お忙しい折、幸司さん、拓也さん、美鈴さんの3人がそろってくれました。始終、笑いが絶えず非常に楽しい取材となり、本当に人が好い！家族仲が良い！と感じました。

▲ 拓也さんも手伝う収穫作業

四代目の拓也さんは、実家を出て熊本県立菊池農業高校で畜産酪農を学び、卒業後は菊池市周辺の各牧場の手伝いをしながら、スキルアップを目指していましたが、幸司さんの苦労を知り実家に戻り就農しました。美鈴さんは「継ぐのが当たり前」と思っていたそうで、拓也さんも「小さい時から継ぐつもりだった」とのこと。幸司さんからは「種付けも早く習得して、休めるようにして」とお願いされていました。業界あるある話でよく耳にする「後継者がいない」だの、「親子で仲が悪い」だの不安は微塵も感じられませんでした。

拓也さんは機械作業が好きで自給飼料関係の作業の腕もメキメキ上がり、品質も収穫量も上がってきているようです。三代で積み上げてきた小原牧場の経営を四代目に引継ぐ準備が着々と始まっていました。

▲ 四代目 拓也さんも出品

日々の楽しみ

幸司さんは、昭和の旧車が好きで3台所有しています。拓也さんは家族と旅行やキャンプをするのが楽しみだそうです。家族で共通するのが共進会への出品や他県の共進会巡りで、拓也さんは第14回全日本ホルスタイン共進会（北海道）に菊池農業高校から出品する機会に恵まれたことを嬉しそうに話してくれました。また、全共の前年に開催している九州連合ホルスタイン共進会（5年に1回）が今年11月に熊本県家畜市場で行われる予定で、心待ちにしているとのことでした。

最後に

お盆も近い気忙しい折に3人そろって取材を快く引き受けてくださり誠にありがとうございました。仲違いもなく営農されており家族経営の長所を随所に感じさせていただきました。三代で辿り着いた本物の酪農経営を四代、五代、その先に繋いでいただきたいと願います。小原牧場が今後益々ご発展するとともに皆さんのご健勝と大分県の酪農が隆盛する事を願っております。

（S・T）

▲ 五代目も牛が大好き！

酪農部発

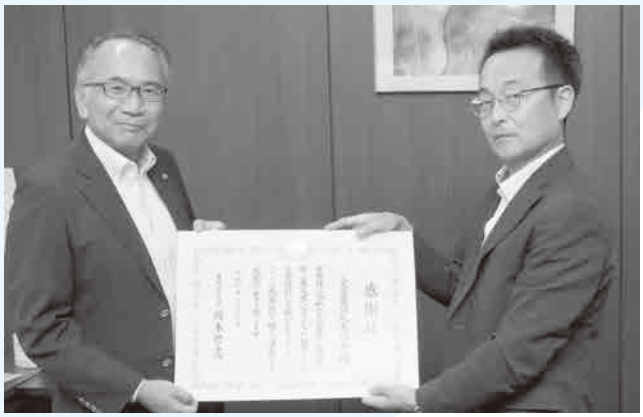
全国農協乳業協会 能登半島地震における支援物資調達協力について、農林水産大臣から感謝状を授与されました

酪農部が事務受託する全国農協乳業協会（会長 大久保克美 東毛酪農業協同組合 代表理事組合長）に、令和6年7月22日酪農会館にて、令和6年元日に発生した能登半島地震における支援物資調達の協力に対して、農林水産省より大臣感謝状が授与されました。

中坪乳製品調整官より、大森業務担当理事（全酪連 常務理事）に対して感謝状が手渡され、「被災地より要望の強かったLL牛乳の支援物資調達が、（一社）日本乳業協会と全国農協乳業協会の協力を得て迅速かつ適切に行えた」と謝辞を頂戴しました。これを受け大森業務担当理事より、「当協会会員である、アイ・ミルク北陸㈱も稼働に影響が出ないまでも工場施設に被害が発生した中で、現地の生乳処理を一手に引き受け尽力をされた。当協会としては、会員の協力を得て迅速にLL牛乳の手配を行うことで、現地への支援ができた。今回のことを得て、さらに会員企業との紐帯を強く持てているということを感じられた」と話されました。

支援実績としては、1月～2月の期間で約3万5千本のLL牛乳を石川県へ届けました。（Y.A）

協力会員名	納入本数
日本酪農協同㈱	5,016 本（209 ケース）
南日本酪農協同㈱	10,000 本（約 416 ケース）
熊本県酪連	20,016 本（834 ケース）



▲ 中坪乳製品調整官から感謝状を受け取る大森業務担当理事（全酪連 常務理事）（当時）

酪農部発

全国農協乳業協会 牛乳パックミニチュアチャームを㈱バンダイより販売いたしました

株式会社バンダイ ベンダー事業部（本社：東京都台東区）が展開するオリジナルカプセルトイブランド「ガシャポン®」にて、全国農協乳業協会の会員が製造する牛乳・乳製品の製品デザインを再現したミニチュアチャーム8種が発売されました。全国のガシャポンバンダイオフィシャルショップ、玩具売り場・量販店・家電店などに設置されたガシャポン自動販売機シリーズにて販売され、全酪連の事務所がある酪農会館でも販売をしております。

令和6年7月18日～19日に愛知県名古屋市で開催された「全国酪農青年女性酪農発表大会」の会場でも、多くの皆様にご利用いただきました。初めて出会う牛乳パックデザインに、「かわいい」「あの牛乳パックがほしい！」と、複数回チャレンジされる方の姿もありました。お近くで見かけた際には、是非チャレンジしてみてください！（Y.A）

▲ 製品ラインナップ

▲ 全国青年女性酪農発表大会で多くの来場者にお楽しみいただきました

全酪アカデミー発

鹿児島県酪農業協同組合「令和６年度酪農後継者キッズ交流会」開催

令和６年７月30日㈫～31日㈬、鹿児島県酪農業協同組合（有村洋平代表理事組合長）主催の「酪農後継者キッズ交流会』が開催され、県内全域から11名の小中学生が参加されました。この交流会は、県内の酪農家の子ども達が様々な体験や交流を通して、将来に亘る仲間作りを図るために開催されています。

交流会の初日は、「鹿児島県酪農乳業株式会社」での工場見学をおこない、消費者の食卓に届く見慣れた牛乳・乳製品の製造過程を学びました。翌日は、有村組合長の牧場である「㈲有村ファーマーズ」にて研修をおこない、自分の家の牧場とは違う酪農に触れ、将来の夢を膨らませた子どもたちもいたことでしょう。最初は緊張していた子ども達もだんだんと打ち解け、また来年会う約束をして帰路につき、ひと夏の思い出を作れたことと思います。

昨年に引き続き、全酪アカデミーの事務局もこの交流会に参加させていただきました。「今日はこのイベントがあるからいつもより早起きして搾乳してきた！」そんな子どもたちの未来の世代までこの業界を守っていけるよう引き続き全酪アカデミーは“新規就農の取り組み”に尽力して参ります。　（N.U）

▲ 鹿児島県酪農乳業㈱での研修

▲ みんなでとった最初の１枚

㈲有村ファーマーズにて ▶

総務部発

全国酪農青年女性会議「令和６年度通常総会」開催

7月17日㈬名古屋東急ホテルにて、第51回全国酪農青年女性酪農発表大会に先立ち、全国酪農青年女性会議（中村俊介委員長）の令和６年度通常総会を開催しました。中村委員長の挨拶に始まり、議事については、

【第１号議案】令和５年度事業報告及び収支決算書の承認に関する件
【第２号議案】令和６年度事業計画及び収支予算（案）承認に関する件
【第３号議案】会費の賦課及び徴収に関する件
【第４号議案】第52回全国酪農青年女性酪農発表大会に関する件
【第５号議案】規約の一部改正に関する件

について協議され、いずれの議案も原案通り承認されました。

続いて、【第6号議案】役員改選に関する件において、役員改選を行い、新たに役員を選任し、役員による互選において、中村俊介氏（九州酪農青年女性会議）が委員長に再任されました。（新役員については下記の通りです。）

▲ 中村委員長挨拶

酪農青年女性会議は、昨年開催した「酪友フォーラム2023」で得た、この先へ力強く踏み出すエネルギーを糧に、51回目を数えた全国酪農発表大会が、酪友の絆を一層強めるとともに、酪農後継者の育成・新規就農の促進につながるよう、委員一丸となり取り組んでいくことを確認しました。そして、「父の日に牛乳（ちち）を贈ろう！キャンペーン」をはじめとした消費拡大運動や理解醸成活動になお一層注力し、消費者が酪農に対する理解につながるよう今年度も取り組んでまいります。　（N.U）

●委 員 長	中村　俊介	（九州酪農青年女性会議　委員長）
●副委員長	西尾　直樹	（中部酪農青年女性会議　委員長）
●副委員長	長友佳奈美	（九州酪農青年女性会議　副委員長）
●副委員長	山下　大介	（西日本酪農青年女性会議　委員長）
●副委員長	斎藤　忠義	（東北酪農青年女性会議　委員長）
●監　　事	中山　　斉	（北海道酪農青年女性会議　委員長）
●監　　事	月田　宗太	（関東甲信越酪農青年女性会議　委員長）

▲ 全国より委員・事務局41名が参集

▲ 発表大会時の新旧役員紹介（旧委員）

札幌支所発

預託・地域内流通増加傾向、組合毎に各種事業実施により導入促す「令和６年度 畜産主任者会議」

８月２日㈮本会札幌支所主催、令和６年度北海道・都府県畜産主任者会議を開催し、道内と都府県の乳牛購買の担当者他77名にご出席いただきました。

畜産事業説明、基調講演（「牛における輸送ストレスについて」本会 酪農技術研究所所長 猪内勝利氏）に続いて、搾乳用素牛導入事業に関する府県の導入動向並びに道内の資源状況について各担当者より説明がありました。

都府県からは、昨年に続く経営状況の悪化による預託や県内流通の増加、更新意欲の低下など初妊牛導入が進み辛いなかではあるが、組合毎に各種導入事業を実施しているとの報告がありました。その中で複数の組合よりA2遺伝子を確保したいとの希望があり、新たな初妊牛導入のニーズにゲノム検査の実施があることが伺えました。一方、北海道からは「昨年これまでにないような猛暑の中各地で授精の遅れが目立ち、その結果夏分娩が増加傾向である。また今後も気候変動によりこのような状況の継続もありうる。」、といった産地状況の変化と、生産抑制からの転換にあたり今後は出品頭数減少見込みといった見通しの説明がありました。質疑応答においては、コスト高、戸数減少が顕著である都府県において組合・市町村が実施している事業について質問があり、小規模・高齢な牧場の継続に向けた機械導入・設備修理への助成や、乳質改善に向けた搾乳部品やバルククーラー洗浄への助成、ゲノム検査・乳房炎予防ワクチンへの助成といった地域の状況に合わせた具体的な事例が紹介されました。

閉会の挨拶に立った本会理事である中春別農業協同組合 望月英彦組合長は「先般全酪連の総会が終了し、新たな決意を持って進んでいく所存だ。この地球上80億人のうち8億人が今日食べるものに困っている。そのような中、酪農家の減少、また生産の抑制、そのようなことがあってよいのか。皆様とともに日本の食糧、動物性たんぱく質の安定供給をしっかり担っていきたいと言う思いである。次の時代は食料の時代となる、これからの酪農を担う酪農家の子弟にはぜひ、酪農が素晴らしい職業であるということを伝えてあげてほしい。」と呼びかけ、会を締めくくりました。

（T.H）

▲ 意見交換会の様子

▲ 本会 猪内所長による講演

▲ 閉会の挨拶に立つ望月英彦代表理事組合長

＼(一社)全酪アカデミーも参加しています／

新・農業人フェア

主催：株式会社農協観光　運営：株式会社マイナビ　協賛：全国酪農業協同組合連合会　他

例年農林水産省補助事業として開催されている「新・農業人フェア」は、就農希望者と就農希望者を募集する自治体や農業法人等が一堂に会し、就農相談やセミナー、説明会を行う就農相談会です。

「農業を知りたい」「働きたい」「かかわってみたい」という気持ちをもつ全ての方を対象とした、入場無料、入退場も自由な、国内最大級の就農イベントです。

イベントの詳細はこちら 〉 https://agri.mynavi.jp/shinnogyojinfair/

開催日	種　別	会　場
7月20日㈯（終了しました）	農業就職・転職 LIVE	東銀座歌舞伎座タワー マイナビ PLACE（東京都中央区銀座）
8月31日㈯（終了しました）	農業 EXPO	東京国際フォーラム（東京都千代田区丸の内）
10月27日㈰	**農業 EXPO・LIVE**	**グランキューブ大阪（大阪府大阪市北区中之島）**
12月8日㈰	農業 EXPO	東京ビッグサイト（東京都江東区有明）
2月1日㈯	農業就農・転職 LIVE	東京交通会館（東京都千代田区有楽町）

全酪連仙台支所移転のお知らせ

全国酪農業協同組合連合会仙台支所は、このたび「カメイ仙台グリーンシティ」へ移転いたします。

酪農生産基盤維持・拡大のため、なお一層の努力で事業を推進してまいる所存でございます。引き続き、ご愛顧賜ります様、よろしくお願い申し上げます。

移転先業務開始日　令和６年９月17日㈫

移転先

〒980-0014
宮城県仙台市青葉区本町２丁目10番28号
カメイ仙台グリーンシティ　8階

☎：022-221-5381　　FAX：022-221-5384
（※これまでと同じ番号です）

一般社団法人 Zenraku Academy

全酪アカデミー

令和６年４月～８月

活動報告

4/3	第 35 回 理事会 特別会員（一般社団法人全国酪農ヘルパー協会）の入会承認について）
5/28	第 36 回 理事会 【第１号議案】令和５年度（第３事業年度）事業報告及び収支決算の承認について 【第２号議案】令和６年度（第４事業年度）事業計画（案）について 【第３号議案】令和６年度（第４事業年度）負担金、年会費の賦課について 【第４号議案】理事及び監事の報酬について 【第５号議案】定時社員総会付議事項について
6/14	令和６年度（第４事業年度）定時社員総会 【第１号議案】令和５年度（第３事業年度）事業報告及び収支決算の承認について 第３事業年度監査報告 【第２号議案】令和６年度（第４事業年度）事業計画について 【第３号議案】令和６年度（第４事業年度）負担金、年会費の賦課について 【第４号議案】理事及び監事の報酬について
8/6	第 10 回 運営委員会 第 37 回 理事会 【第１号議案】事務局の事務局長及び所要な職員（事務局員）の任免について 【第２号議案】運営委員長及び運営委員の任免について 【第３号議案】臨時社員総会の開催（理事の辞任に伴う後任理事の選任）について
8/19	令和６年度（第４事業年度）臨時社員総会 【第１号議案】理事の辞任に伴う 後任理事の選任について

新役員体制

理事長

北池 隆
全国酪農業協同組合連合会
代表理事専務

理事

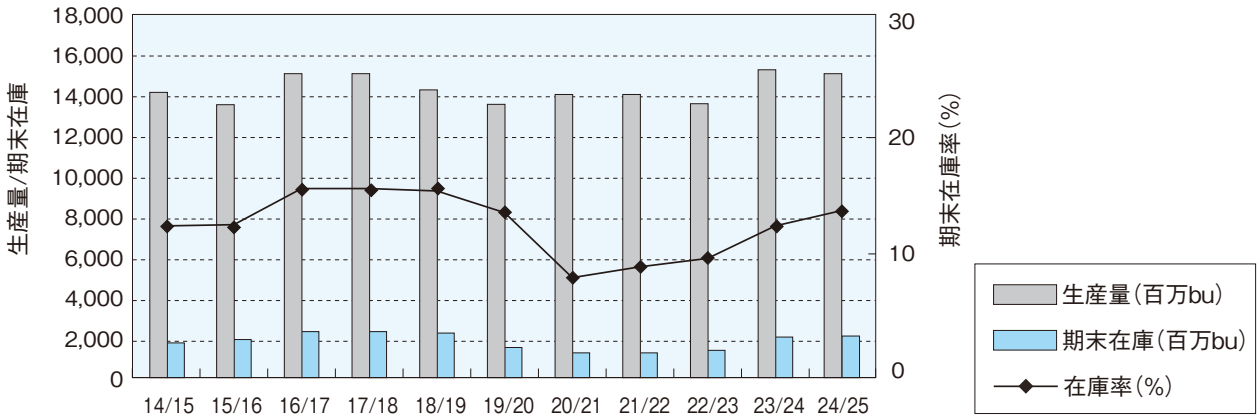
佐藤 弘
全国酪農業協同組合連合会
常務理事

岡田 征雄
一般社団法人全国酪農協会
常務理事

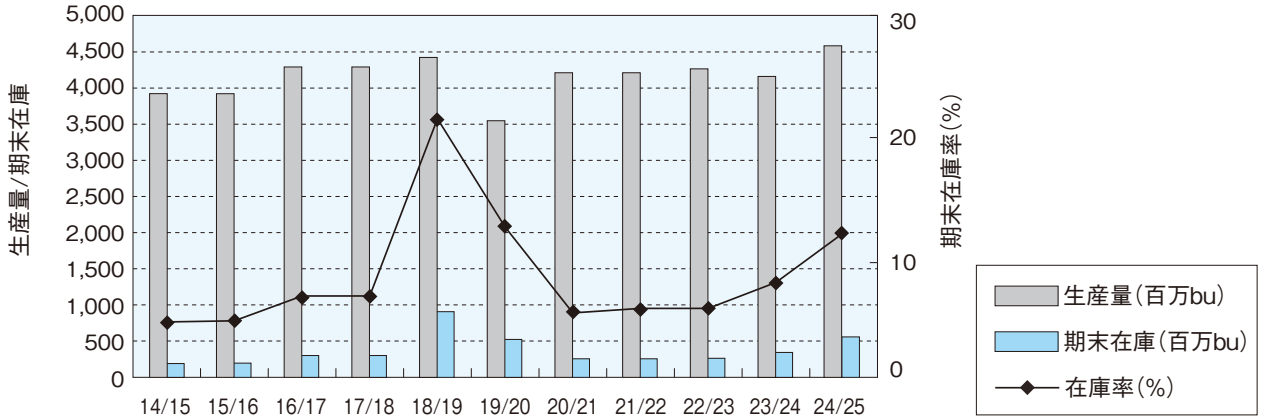
原料情勢　令和6年8月

		23/24年産	24/25年産
8月12日発表 米国農務省 トウモロコシ 需給予想	作付面積（百万エーカー）	94.6	90.7
	単　　収（ブッシェル/エーカー）	177.3	183.1
	生 産 量（ブッシェル）	153億4,200万	151億4,700万
	需 要 量（ブッシェル）	148億6,500万	149億6,500万
	期末在庫（ブッシェル）	18億6,700万	20億7,300万
	在 庫 率	12.56%	13.85%
トウモロコシ 相場動向	今回のUSDAの発表では期末在庫率が低下したため直近の相場は値を上げているが、米国では適度な降雨や生育に適した気温の影響から作柄は良い状態を維持しており、高単収が期待される。南米産についても収穫が順調に進んでおり、シカゴ定期は軟調に推移している。		
大豆粕相場動向	米国・ブラジル産共に順調な生育からシカゴ相場は軟調に推移している。8月の大豆需給報告では、24／25クロップで米国・ブラジル共に過去最高の生産量予測となっていることからシカゴ相場は下落した。また、為替円高も価格を下げる大きな要因となっている。		
糟糠類	【一般フスマ】　インバウンド需要の回復により主製品の発生が増えているため、ふすまの発生も増えてはいるが、飼料需要は堅く、余剰感はない状態となっている。		
	【グルテンフィード】　国産は現在稼働期であるが、主製品の売れ行きや、フィードの歩留まりの悪さから供給が逼迫しており、不足分を中国産などで補っている。		
海上運賃	現状、石炭や鉄鉱石の需要は旺盛だが、船舶の供給も安定しており、市況はやや下落傾向にある。		

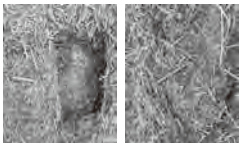
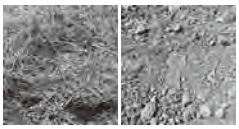
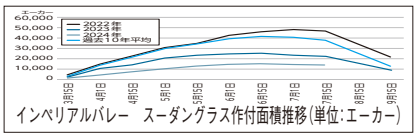
米国産トウモロコシ生産量と期末在庫の推移



米国産大豆生産量と期末在庫の推移



輸入粗飼料の情勢　令和６年８月

北米コンテナ船情勢	北米西海岸航路は乗継航路を含めて主要な本船スケジュールの乱れが続いており、遅延が発生しています。世界最大の積替港のシンガポールでは、改善は見られるもののコンテナの滞留が続いており３～５日程度の沖待ちが発生しています。パナマ運河の渇水による通航隻数の制限は日を追うごとに緩和されていますが、依然としてスエズ運河近くの紅海での商業船へ向けた攻撃は続いており、世界的な物流状況の回復までは時間が掛かる見込みです。カナダでは鉄道労働組合（TCRC：Teamsters Canada Rail Conference）とカナディアン・ナショナル鉄道（CN）および、カナダ太平洋カンザスシティ・サザン鉄道（CPKC）の労使交渉は、組合側からの争議行為としてストライキ告知まで発展しましたが、告知内容が労働基準法に違反する部分があったとして労使関係委員会（CIRB）より取り消しの告知が宣言されました。しかしながら、労使交渉は緊迫した状況が続いているため、今後の状況には注視が必要です。
ビートパルプ	【米国産】　７月は全米各地で生育が順調に進み、８月中旬より24年産の製造が開始される見込みです。ミネソタ州やアイオワ州の一部の地域では６月に発生した豪雨による洪水の影響で、収量は例年並み～例年以下と予想されています。７月１日よりEU（欧州連合）はロシア産の穀物や油糧種子、穀物製品の輸入関税を引き上げました。ロシア産ビートパルプに対しても関税が適用となったため、米国やエジプトといった他産地へ需要が流れ始めており、今後の相場動向には注視が必要です。
アルファルファ	【ワシントン州】　主産地であるワシントン州コロンビアベースンでは、24年産２番刈の収穫が終了し、３番刈の収穫作業が順次開始されています。天候に恵まれたことで、２番刈の品質は、色目が良く葉付きが良好なものが多く収穫されています。依然として、日本や中国の需要減退や産地相場の低迷により輸出業者は積極的な買付を行っておらず、産地での取引は鈍化しています。
	【オレゴン州】　主産地であるオレゴン州クラマスフォールズでは、１番刈の収穫が終了し、２番刈の収穫作業が開始されています。収穫作業中の降雨により30%程度が雨あたりとなりましたが、春先の冷涼な気候もあり、例年に比べ茎細で、葉付が良好な成分が高い品質も多く発生しています。同州中部クリスマスバレーにおいても１番刈の収穫が終了しています。１番刈の収穫時期は例年よりも遅かったものの、収穫期の天候が安定していたことで降雨被害はなく上級品が多く発生しています。  ◀ 24年産１番刈オレゴン産アルファルファ ７月中旬撮影
	【カリフォルニア州】　カリフォルニア州南部インペリアルバレーでは現在５番刈の収穫が終了し、圃場によっては６番刈の収穫が開始されています。産地では連日40℃を超える気温が続き、成分値が低く、色褪せたサマーヘイ中心の発生となっています。インペリアルバレー灌漑局の発表によると、７月15日時点でのアルファルファの作付面積は142,263エーカー（前年同期は145,769エーカー）と前年同期比98%と減少しています。
	【ネバダ州】　ネバダ州北部では２番刈の収穫作業が終盤を迎えています。ワシントン州やオレゴン州同様に春先の冷涼な気候が続いたこともあり、１番刈の品質は良品が多く発生しています。成分値が高い品質のアルファルファは米国内酪農家向けで堅調な需要がありますが、輸出業者は産地相場を見極める状況が続いています。
	【ユタ州】　ユタ州では１番刈の収穫作業が終了し、現在２番刈の収穫作業が終盤を迎えています。天候に恵まれ降雨被害がなかったこともあり、収穫された品質は良品が中心となっています。24年の総生産においては、冬季期間の降雪や降雨により十分に地下水もあることから、このまま順調に生産が進めば４番刈まで実施できると予想されています。
チモシー	【米国産】　主産地であるワシントン州コロンビアベースンおよびエレンズバーグ、アイダホ州では１番刈の収穫作業が終了しており、２番刈の収穫作業が開始されています。春先の冷涼な気候や、各産地での降雨被害はわずかということもあり、収穫された１番刈の多くは上級品で中～低級品の発生は限定的です。１番刈収穫後は他作物への転作や、山間部の貯水池の水不足により農業用水への取水制限も予定されていることから、24年産の生産量は23年産と比較し減少する見通しです。
	【カナダ産】　主産地であるアルバータ州南部レスブリッジ地区では１番刈の収穫が終了しています。今年は生育期の降雨により土壌状態は良好でしたが、７月に入り高温な日も続いたことで一部茶葉が見られており、中級品が多く収穫されています。生産農家は２番刈の収穫に向けて灌水や施肥の準備を進めています。同州中部のクレモナ地区では、例年と比較して１週間程度生育が遅れていましたが、６～７月の猛暑と乾燥により生育が早まりました。現在、１番刈の収穫作業は最終盤を迎えており、収穫された品質は中級品が中心となっています。８月も乾燥した日が続くため収量は例年を下回るものの、低級品の発生は限定的になる見通しです。
スーダングラス	主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、１番刈の収穫が最終盤を迎えており８月中旬には終了する見込みで、２番刈の収穫作業も７月末より開始されています。湿度の高い日があったものの好天に恵まれたことで、これまでに収穫された１番刈の品質は上～中級品の発生が中心となっています。産地相場低迷もあり２番刈の生産を行わず圃場にすき込む生産者も多く、更なる生産量の減少が懸念されています。23年産の在庫に加え、未だに22年産の旧穀在庫を抱えている輸出業者もいるため作付面積の減少による供給力に懸念はありませんが、今後の相場次第では今期の生産量と繰り越し在庫より需要が上回ることも考えられるため注視が必要です。灌漑局の発表によると、７月15日時点の作付面積は13,879エーカー（前年同期は22,456エーカー）となっており、前年同期比62%と、低水準での推移が続いています。  ◀ 左:スーダングラス上級品 7月中旬撮影 右:１番刈収穫後、すき込んだ圃場  インペリアルバレー　スーダングラス作付面積推移(単位:エーカー)
クレイングラス	**クレインは全酪連の登録商標です。** 主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、２番刈の収穫が終了し、圃場によっては３番刈や４番刈の収穫が開始されています。産地では湿度が高い日もあり、圃場での乾燥に時間を要したことで２～３番刈りの一部では色褪せたような品質も発生していますが、柔らかく葉付が多い良品も多く生産されています。DIPプログラム（休耕地政策）が実施される場合、４～５番刈を生産せずに24年産の生産を終了する生産農家も出てくる可能性もあり、総生産量は30%減少すると言われています。灌漑局の発表によると、７月15日時点の作付面積は21,119エーカー（前年同期22,179エーカー）となっており、前年同期比95%とやや減少しています。
バミューダ	主産地であるカリフォルニア州インペリアルバレーでは現在バミューダヘイの３番刈の収穫が開始されており、副産物のストローについても収穫が開始されています。種子の生産が活発に行われているため、ストローの生産も多く、安価な草種として輸出向けに限らず米国内肥育農家向けにも出荷されています。灌漑局の発表によると、７月15日時点の作付面積は68,543エーカー（前年同期：65,080エーカー）、前年比105%となっています。
DIP（Deficit Irrigation Program）（休耕地政策）について	６月末にインペリアルバレー灌漑局よりDIPプログラムの詳細が正式に発表され、現在、政府環境機関の最終判断待ちとなっています。DIPプログラムの対象はアルファルファ、クレイングラス、バミューダ（多年草）となっており、生産農家は生産している品目、収穫進捗に併せたプラン（45日/60日の休耕日数）を選択し、圃場への水入れを止め、節水することで補助金を得るという内容です。生産農家は牧草生産とDIPプログラムへの参加を比較してより収益を得られる方を選択しますが、牧草の相場が低迷しているため、多くがDIPプログラムに参加する見通しです。このDIPプログラムが決まった場合は2026年度までの３年間実施されるため、夏場の牧草生産が減少し価格高騰の一因になることが懸念されています。
オーツヘイ・ウィートストロー	【豪州産】　７月は西豪州や南豪州で例年を超える降雨がありました。８月も各地域で降雨予報が出ているため、生育も順調に進むと予想されています。今後の降雨量次第では収量へ影響を及ぼす可能性があることから注視が必要です。韓国や台湾向けの輸出量は順調に推移していましたが、韓国向けで供給過剰となっており落ち着いています。中国向けは輸出認可解禁後、右肩上がりに需要は回復していましたが、現在の中国国内の酪農情勢は良くなく乳製品の需要も停滞しているため、今後の輸出量は大きく増加しないと予想されています。豪州海運情勢については紅海問題やアジア地域の積替港に残留している大量のコンテナの影響により、引き続きスケジュールの乱れが続いています。船会社はスケジュールの正常化のためにブランクセーリング（抜港）や寄港の調整を行っていますが、回復には時間が掛かる見通しです。

農業経営統計調査 営農類型別経営統計
にご協力ください

「農業経営統計調査」の営農類型別経営統計は、農家及び農業法人の経営状況を明らかにし、農政推進に必要な資料の整備を目的に毎年行う調査（標本調査）です。

調査結果は、「食料・農業・農村基本計画」の「農業経営の展望」における農業経営モデル作成の際の基礎資料に活用されるほか、食料自給力指標の算出、補助金等の算定、スーパーL資金等の制度資金の要件変更の際の基礎資料に活用されるなど、活用範囲は多岐に渡っています。

本調査の趣旨をご理解の上、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

詳しくは右記URLをご確認ください

➡ https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/noukei/einou/index.html

お詫びと訂正

本紙８月号（No.707）22ページに掲載しました第14回 酪農いきいきフォトコンテスト入賞作品紹介の作品名と作者名に一部誤りがありました。謹んでお詫び申し上げますとともに、訂正いたします。

＜誤＞　入賞「親子愛」東北酪農青年女性会議　椎谷 和市 氏

↓

＜正＞　入賞「母になったマノン」東北酪農青年女性会議　椎谷 美保 氏

「母になったマノン」
東北酪農青年女性会議
椎谷 美保 氏

INFORMATION

北海道 乳牛産地情報

令和６年９月１日現在

札幌支所 TEL 011-241-0765
釧路事務所 TEL 0154-52-1232
根室駐在員事務所 TEL 01537-6-1877
帯広事務所 TEL 0155-37-6051
道北事務所 TEL 01654-2-2368

価格状況 ↑……強含み ↗……やや強含み →……横這い ↘……やや弱含み ↓……弱含み

事務所	畜種	相場(万円)	価格状況	管内状況
札幌管内	育成牛(10-12月令)	20～30	↓	札幌管内の8月中旬までの生乳生産量前年比は、函館管内月計で96.0%、累計で97.0%、苫小牧管内月計で95.5%、累計で96.3%の実績となっております。9月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。秋から冬分娩中心となり、出回り頭数も多いことが予想される一方、秋導入に向けての需要は回復することが予想されることから、相場は横這いで推移すると見込まれます。育成牛に関しましては、夏産まれの育成牛が出回ることから、弱含みで推移することが予想されます。また、和牛受精卵移植腹が軟調に推移しています。優良牛や高能力牛の多い地域でもあるため、上クラスの初妊牛を取りそろえることが可能な地域です。価格が落ち着いているこの時期に導入をお勧めいたします。
	初妊牛	40～50	→	
	経産牛	30～40	→	
釧路管内	育成牛(10-12月令)	20～30	↓	根釧管内の8月中旬までの生乳生産量前年比は、釧路管内月計で99.0%、累計で99.5%、中標津管内月計で101.7%、累計で100.3%の実績となっております。9月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。初妊牛に関しましては、猛暑の影響などによる一定の更新需要により、秋に向けて導入意欲は徐々に上がってくるものと思われますが、相場は横這いで推移すると見込まれます。相場の動向や生乳生産抑制からの脱却により、道内酪農家においては、販売せずに自家保留とする牧場も増えてきており、出回り頭数が少ない状況が続いております。腹別では先月に引き続きF1腹の引き合いが強くなると思われます。
	初妊牛	43～53	↗	
	経産牛	33～43	↗	
帯広管内	育成牛(10-12月令)	20～30	↓	帯広管内の8月中旬までの生乳生産量前年比は、帯広管内月計で100.0%、累計で99.5%の実績となっております。9月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。秋分娩から冬分娩中心になり、資源頭数も確保できる状況であります。相場につきましては、秋に向けて需要が回復していくと見込まれ、やや強含みで推移すると見込まれます。F1腹の引き合いが強くなり、雌雄選別腹の相場につきまして軟調に推移すると予想されます。育成牛に関しましては、夏分娩になる月齢の育成牛の出回りが多くなることから弱含みで推移されると予想されます。経産牛に関しまして、即戦力として引き合いが強くなることが見込まれ、相場につきましては、強含みで推移すると予想されます。
	初妊牛	43～53	↗	
	経産牛	33～43	↗	
道北管内	育成牛(10-12月令)	30～40	→	道北管内の8月中旬までの生乳生産量前年比は、稚内管内月計で97.4%、累計で97.7%、北見管内月計で102.0%、累計で101.0%の実績となっております。9月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。冬に向けた分娩中心となります。北海道でも猛暑日が続き、搾乳牛の事故も発生しており、緊急的に導入を行う酪農家もいるため、生体取引の値動きも堅調に推移すると予想されます。出回りの腹別の資源状況については、雌雄選別腹、F1腹ともに潤沢な状況です。経産牛については、道内からは即戦力を求める動きで需要が高まっています。秋・冬分娩の経産牛も動きは堅調に推移すると見込まれ、価格は強含みで推移すると予想されます。
	初妊牛	43～53	↗	
	経産牛	33～43	↗	
道内総括	育成牛(10-12月令)	20～30	↓	道内の8月中旬までの生乳生産量前年比は99.8%、累計で99.3%の実績となっております。9月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。涼しい季節に向けた分娩中心となり、導入意欲の回復が予想されることから、初妊牛・経産牛の引き合いが強くなると見込まれます。道内一部の酪農家においては、資源の自家保留に移行する傾向もありますので、今後の出回り頭数の動向には注意が必要です。しかしながら現状においては、資源確保ができる状況にあります。道内・都府県問わず、分娩時期の偏り、猛暑の影響、季節の変わり目等を理由とした分娩事故の増加による、不足分導入の動きも出てくることが大いに予想されますので、既に導入予定がございましたらお早目のご注文を宜しくお願いいたします。
	初妊牛	43～53	↗	
	経産牛	33～43	↗	

今月の表紙

今月の表紙は「第14回酪農いきいきフォトコンテスト」に応募いただいた作品「未来は明るい」（岐阜県 生駒薫氏 撮影）です。

令和６年９月10日発行（毎月1回10日発行）
全酪連会報 ９月号 No.708

●編集・発行人 津田知亮
●発行 全国酪農業協同組合連合会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木一丁目37番２号 酪農会館
TEL 03-5931-8003 https://www.zenrakuren.or.jp/

編集後記

●厳しい残暑が続いていますが、体調には十分注意を払ってお過ごしください。大雨や台風の被害も各地で続いています。皆様のご無事を心より願っております。

●秋は、全国各地でもイベントが開催されますね。全国酪農青年女性会議では9月29日(日)に新宿駅西口イベントスペースで理解醸成活動を開催いたします。酪農の理解醸成や牛乳・乳製品の消費拡大PR等、一層力を入れて活動して参りたいと思います。

●会報に関するご意見・ご要望等があれば、以下のアドレスにメールをいただければ幸いです。
shidoukikaku@zenrakuren.or.jp

今月の らくのう こどもギャラリー 入賞作品紹介

双子のツーショット
岩国市立錦中学校 2年（西日本）　榎本美幸

今月の入賞作品は…
岩国市立錦中学校 2年（西日本）の榎本美幸さんの作品です。
双子の子牛さんの様子を、色鉛筆で丁寧かつ正確に描けましたね。牛さんのお顔の表情の違いも描き分けられているところが見事です。牛舎内の描写は、定規できれいに引いた柵の線に面白みがあり、また床面に牛さんの影を描くなど、完成度の高い作品に仕上がってます。

※この作品は本会と全国酪農青年女性会議共催の「第50回らくのうこどもギャラリー」で全国255点の応募作品から入賞12点に選ばれたものです。

主催　全国酪農青年女性会議